

---

# 魔物ダンジョン～人間との戦争～

サンタ黒須

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔物ダンジョン〜人間との戦争〜

### 【Nコード】

N0054X

### 【作者名】

サンタ黒須

### 【あらすじ】

ある日車による交通事故で轢かれた俺は魔物のスライムになっていた。

ダンジョンで先輩スライムに会い『スライム帝国』に連れて行かれる。

新たに1つスキルを習得したり、スライムがうじゃうじゃで吐き気をもよしたり、村長の話聞いて人間を殺すことになった。

そして、主人公の過去が成長と共に暴かれたり、美人だけは殺さな

かったり、

友達のスライムたちとうじゃうじゃやって行きます。  
主人公は基本チートスキルを使い進化していきます。

スライムたちはえぐいこと大好きです。

魔王様のためにダンジョンを広げていきます。

## 1日目始まりの日 俺と魔物ダンジョン・

俺はダンジョンに転生した。

ちなみに俺は前世の記憶が人間だ。

え．．．．．どんな異世界モノという感じだ。  
まったくその通りだ。

以前俺はピザのアルバイトをしていてその途中に車に轢かれて死んだようだ。

まだ高校3年だったのに、童貞卒業したばかりなのに、  
まったくどうしてくれんだよ。

彼女はまあ結構可愛かった。彼女の描写は黒髪のショートヘアー  
のロリ体質だ。

マジで萌えた。彼女と一緒にいると俺が犯罪者に見える、と悪友共  
に言われた。

怒るよりもあときは優越感しかなかったな。

所詮お前らはいつまでたっても卒業できないんだよ、と言ってやっ  
た。

まあ高校は卒業できなかったが悔いはない

まだ過去の武勇伝はいつぱいあるぞ。

え、もう十分だ？

いやそんなことないだろ。

早く進め？

仕方ないな、全く。

現状確認、俺はどうやらスライムのようだ。

透明（透けている）な緑色をしている。俺の中心には核みたいなものはない。全体的に黄緑色をしているスライムのようだ。

目見えるが眼球的なものはない。なんか目の部分だけ少し凹んでいる。

状況の確認だがここはフロア1階で前世から察するに一番弱いモンスターたちがうろつく場所だ。

何故フロア1階と分かるかというとき冒険者？たちの会話が聞こえてきたからだ。

フロア1階は黒色のレンガが大体6メートルぐらいまで積み上げられ横幅も5メートルとかなり広いようだ。まあ戦闘するにはそんなに必要だと思う。

今のところ聞こえてくる音を頼りに冒険者・勇者などには会わないようにしている。会ったら死亡フラグが立つのは目に見えている。

何故俺がここにいるかは「まるで分からない」という立派な結論に至った。2、3分考えたんだよ？

しいて言うなら神様が俺が幸せになろうとしているときに死んだので頑張れ、つつう事じゃね。

神様には何でわざわざ魔物にしちゃったの？と問いかけたい。

即死亡でもう一回転生フラグしか立たなくね？

まあ死なないためにも強くなることを決意。

この決意はあてにはなりません。

この黒いレンガの天井には電灯？見たいな光る石が二つずつ一定の

感覚で正確に並んでいる。

おお何か近代的だな。感嘆の一言に尽きるぜ！

状況がある程度分かったのでできることを確認しよう。

まず歩いているとのそのそと人間が歩くくらいのスピードで歩ける。ナメクジみたいな感じ。

触手が伸ばせる気がしたので「伸ばす」と腕を突き出すイメージでやると自分の体の大きさを分、

大体手のひらを握って30個分位の体から触手が全体の3分の1くらい伸びた。

攻撃手段は基本パンチだな。

スライムの攻撃方法が良く分かりません。

それから10分ぐらい自分の体で遊んでいると、別種のスライムを見つけた。

そのスライムは青色で真ん中に大きな一つ目がついていた。

大きな目にはその目を守るように黄色い輪がある。

直感で俺の上位種だと感じた。

スライムの頭の上に文字があった。

『ヨガスライム』

スライムの名前だろう。俺は、と考えていると『グリーンスライム』と頭に浮かんだ。

そんなことを考えていると俺と同等ぐらいの速さで近づいてきた。

「よお、新入り」

喋るんだ！！

まさか喋るとは思わなかった。かなり気軽に話しかけてくるな。

俺も喋れるんだろうとここで話しかけてみる。

「何ですか？」

おお、喋れた。口が凹んで喋ることができるみたいだ。

「まあついて来い」

どうする？知らないスライムについて行っていいのか？

.....まあいいや。

歩き始めて2分、このスライム息切れし始めたぞ。大丈夫か？と思っ  
ていると他にもスライムがいた。

そのスライムは俺と同じグリーンスライムのようなようだ。

先輩が俺にかけたような言葉をそのグリーンスライムに掛ける。

そのグリーンスライムサンにはリボンがついていた。

まさか、それで見分けると？

俺も自分の頭に目を頑張って向け確認すると、

俺には3つに分かれている矛のような飾りを見つけた。ちなみにヨ  
ガスライム先輩は頭に三角のしましまの模様の入った飾りがある。

先輩に聞いてみると特徴らしい。

その他にも18体ほど新入りを見つけ自分たちの町があるからそこ  
に行く、

と言われた。

ついて行くこと5分、一つの絵画の前に着いた。絵画の大きさはス  
ライム10体分くらいの大きさだ。

奇妙な模様があるその絵画に対して「すらーむ、スライム、すらす  
らいむ」

とヨガスライム先輩がつぶやくと、

絵画の真ん中から自分たちが通れるくらいの穴ができそこに入ると、

長い通路があった。このレンガも黒い明かりもさつきと同じように  
ついている。その通路を歩くこと十分、  
『町』に辿り着いた。

町は通路とは異なり大きな空間だった黒いレンガの天井は明るく照  
らされ町というより  
都市という感じがした。

町には多くのスライムがいた。商店街みたいなところもあり、かな  
り賑わっていた。

何が売っているか見ると魔物用のお菓子、ジュース、戦闘薬（攻撃  
力と能力が一時的に上がる）、  
など多数見受けられた。

スライムの生活って結構いいみたいだ。

お菓子とかあるしな。

お菓子はクッキーとかがある。

どうやって作った？

その他にもマンションがありどうやらあそこに住むようだ。先輩が  
言うには。

何か近代的だな『スライム帝国（適当に考えた）』まじパネエわ。  
それと賑わうのはいいがスライムが多すぎて若干吐き気をもよっし  
た。

見ているとヨガスライムは人口の（スライムだが）．．．．．5  
割くらいを占め3割くらいがレッドスライムというグリーンスライ  
ムの3倍の大きさのヨガスライムより上位種がいた。

亜種というモノも存在し黒い色や白色、オレンジ、などがいた。



亜種は進化系なので最初から亜種が生まれることは初代スライム「アルカバル様」以外ないといわれている、らしい。ヨガスライム先輩から聞いた。

アルカバル様は虹色だったらしい。やばいな初代様。

亜種は1割しかいなかった。

希少種もいるにはいるが今はいないそうだ。希少種の色は銀、金です。

初期のグリーンスライムだがリポップ期と言いその頃に俺たち新入りが出てくるそうで、他にもゴボルドなども新入りが入ってくるみたいだ。

つまり俺たちはリポップと言うダンジョンが魔物を生み出す行為により生まれたようだ。

壁から生まれてくるようだ。

実際に見てみたいものだ。

他にも聞きたかったが村長様が説明してくれるので、そのときに聞けと言われた。

そして、町の一番奥の豪華な一軒家に辿り着いた。

ヨガスライム先輩は大きな目をこちらに向け言った。

「村長様の言うことを姿勢を正してよく聞けよ」

どう姿勢を正せばいいのかは分からなかったが、きっちりしよう。

村長の家は金銀財宝でかなり美しかった。他のスライムやりボンの子も惚けていた。奥の部屋から村長が出てくる。

村長の隣には奥様らしき人が一緒にいた。

村長は黒色のレッドスライムの亜種だ。強そうな感じがあり、本当に強いんだろう。

黒ってカッコイイな。

でも蒞弱みたいww

奥様もレッドスライムの亜種で白色だ。可愛らしいピンクのリボンを着けている。恋愛感情は全くわかないが。幸せ夫婦と言う感じがする。

村長はにっこりと微笑み（そう見える、でも何か顔が怖い）

「ようこそスライムの町へ」

と歓迎の言葉をくれた。

奥様も微笑んでいる。

新たな仲間が着てうれしいんだろうか？

たぶん社交辞令だろうが………

「キミたちはリポップしたばかりでまだ何も分からないだろうから、

今からする説明を良く聞いておくんだ。

まずこのダンジョンという迷宮には数々の魔物たちが存在している。

そして私たち魔物たちはこのダンジョンから生まれこのダンジョンの拡大を狙っている。

地上には人間たち、地下には魔物と言った具合だ。

そして我々スライムたちは魔王様の命で人間たちの領地を奪ったり、ダンジョンに来た人間共を勇者と呼び、その勇者たちに奇襲をかけたり、地上の人間どもを殺して魔力を蓄えて蓄えた魔力を魔王様に捧げる事で上位種になれるというわけだ。

まあ、キミたちはまだ人間を見たことないだろうが、人間共は我々を殺しにくる化け物と考えてくれ。

生きて捕まえたときは魔王様に貢ぎ奴隷として働かせるのだ。

奴隷として捕まえた人間共はダンジョンの拡大のために働いてもらう。

捕まえるのは余裕があればだが。

最初は捕まえなくてもレベルを上げ進化するためにも殺すことに専念しろ。

更に魔王様を殺しにくる馬鹿な勇者の軍団は奇襲をかけ、他の魔物たちと共に集団で殺すことになっているが、

戦力にならないモノ達はここにおいて帰りを待っていたりすればいい」

村長が一度話を区切る。

村長の話を聞く限り魔物たちもかなり欲深な気がするな。

まあそんな事はもちろん言わないが、  
しかし元人間の俺としてはあんまりたくないな。

うん．．．．．

よし俺は美人の人間とは戦わないがキモイ奴は殺す。  
そういう方針で行こう。

美人は正義です。俺の宝です。

キモ男は躊躇なく殺してしまおう。

なんか俺がいけない人みたいになってきたが、今はスライムなんで。

魔物たちは奇襲っていうのも、かなりプライドがないなw

別に俺もプライドとかないからいいけど。

奇襲とか余裕でするし、

相手の弱点ばっか狙うし。

正々堂々？

そんな甘いことをする気はありません。

(女子を除く(美人な人のみ) (ブスは躊躇いません) (特にリア  
充っぱいいケメンな貴族のウザイ奴はいたぶって殺すよ) )

ピコーン

何だ変な音が鳴ったぞ。

レベルアップ？

【スキル・プライドなしを習得】

解説

プライドがないため躊躇なくスライム道を進むことができる。

効果

攻撃力上昇、一撃必殺率上昇、経験地上昇、隠密上昇、イケメン憎悪度上昇、

おい、

何かすごいスキル手に入れたぞ！

プライドなしすげえ！！

何か逆にこれはこれで悲しいが……………

それより解説がひどい。何なんだよスライム道って？

プライド捨てるだけでこのスキルやばいな。

他の奴らはどんなスキル持ってんだろう？

俺みたいなスキルはたぶんないよな。

スキルは今のところ俺の心の変化により出てきた……………

いや、成長したから出てきたと言うことだろう。成長したのか？

退化した気がしないでもないな

ステータスとか見れないか？

(ステータス)

頭の中で強く念じると情報が出てきた。おおすごい。

グリーンスライム

LV1

魔力値25

進化するための必要魔力値300

スキル

【プライドなし】

【王の威圧】王に進化で解除

【あ、人違いです。スライムです】

【××の記憶】条件あり

【知る権利】

プライドなし以外にもあったが……………

1つ明らかにふざけてるよね？

【あ、人違いです。スライムです】  
って何なんだ！！

他のは転生チートかなんかで凄そうなのに

【あ、人違いです。スライムです】の解説を見ると

解説

スライムになったことではいろんなモノに変化できるようになった。

これでスライム道も余裕だね。  
効果

一度触れた物に一部だけ変化させたり、全体を変化させることができる。

解説いらなくね？効果さえ見れば十分だな。

【知る権利】は相手のステータスや自分のステータスを知ることができるスキルのようにだ。ステータスを見れたのはこのスキルのおかげだ。

解説では

あなたはスライム道を効率よく歩くためにいろいろなことを知ることがができます。

やったね。

相手や自分のパラメーターはまだレベル制限により一部しか知ることができないよ。

本当にごめんね！

レベルがある程度行けばより詳しく見れるようになるよ！

他のスキルも見ようとしたがさっき習得した【プライドなし】しか見れなかった。

解説うぜエ

あとまだ村長の説明の途中だった。

「えーごほん」

わざとらしい咳を一回してまた話し始めた。レッドスライム亜種の黒村長は声が結構低かった。

ちなみに声を出すときはスライムの口のありそうな部分をあけて喋っている。

それとリポップしたスライムは言葉を最初から覚えていてという設定だ。

「まあ大体分かってくれたと思う。

それで商店街があつたと思う。

あそこの貨幣制度を話そう。

まずお金だが1ヶ月10万円稼げば安心して過ごせると考えてくれ。

お金は魔王様への功績によりもらえる量が違ってくる。

まず人間1人を殺すたびに5000円貰える、

勇者を殺せば50000円貰えるとかかなり高額だ。

どうやって殺した数を確認するかと言うと

この魔物カードだ」

村長は自分の腹の中から黒いカードを取り出し見せる。

そこには



---

レッドスライム亜種・黒

LV83

残金1630万円

アイテム209個保存

今月殺した人間 53体

今月殺した勇者19体

魔物ランクB

---

村長が説明を続ける。

「今見てくれたと思うが、我々魔物はこのカードを皆自分の体内に宿している。

皆、魔物カード出て来いやつと念じてみるんだ。

それと魔物カードにはアイテムを収納する力もある」

出てきた。

---

グリーンスライム

LV1

残金5000円

アイテム1個保存

殺した数0  
魔物ランクE

---

あれ5000円入ってるし、  
アイテムも一つある。

「皆5000円とアイテムが一つあると思う。  
それは私からの褒美だ。  
うまく使ってくれ」

村長の話が終わったようだ。

「では村長俺は新入りを案内してきます」

ヨガスライム先輩が言う。  
「じゃあお前らついて来い。  
部屋に案内してやる」

でっかい赤いレンガのマンションにたどり着いた。アパートってい  
う感じだ

「ここがお前たちの住む場所だ。

名付けて『新入りアパート』だ!!!

お前たちは1人前になるまでここで過ごしてもらおう。

家賃は最初の一月だけ1000円と格安だ。

その後は2500円だ。

払いはカードを受付のところの黒い台があるだろ。

あそこの丸のマークに5秒ほど当てればOKだ。

よし鍵を今から渡すから確認して自分の番号の部屋に行け。

今からは各自、自由に過ごせ！

お前たち新入りスライムは勇者の相手はきついだろっから、

村に行って人間の子供とか女を狙うようにしろ。

商店街に行くなら、腹が減らないよう食べ物や地図を買っておけ。

攻撃するための道具も高いだろうが買えば更に人間を殺しやすくなるはずだ。

まあ、がんばれ。

聞きたい事があれば各自どっかのヨガスライムのお兄さんたちに聞け！

解散！！」

自分の部屋に着いた。

触手により鍵を持ちドアを開ける。

新入りアパートには冷蔵庫が一つあるくらいで

他は何にもなかった。

村長の家にはテレビがあったのに、よし今のところの目標は人間を殺しまくりテレビを買う。

そうしよう。

まずはアパートの家賃を払ってこよう。

受付の黒い台がある。

受付はヨガスライムのお姉さんがいた。

性別の判断は特徴の飾りにより決め付けた。

「あの登録はここでいいんでしょうか？」

「ええ、登録して行って新人さん」

台座の上の丸いマークにカードを押し当てる。

おし当てて残金が減って4000円になった。

よし、できた。

カードを自分の体内に取り込むイメージで入れる。

他のグリーンスライムたちものそのそと来た。

「あら、あなた早いのね」

グリーンスライムの一番前に居たスライムが話しかけてきた。

「ああ、部屋には冷蔵庫しかなかったからな」

「それもそうね、これから私たち地図を買ってから、人間の村に行こうと思うのだけど、

あなたも来ない？」

人間の村か、どちらにしる行くなら集団で行ったほうがいいしな。

「ああ、じゃあそつするよ」

「わたくしの名前はムラサキよ  
よろしくね」

名前があるのか。

俺の前の名前は秋山あきやま 鷹彦たかひこだけど、  
もっと普通な名前がいいかな、

ムラサキという名前なんだから俺はブラックにしようか

「俺はブラック、よろしく」

他のグリーンスライムの人たちとも少し会話してから商店街に行っ  
た。

地図と食べ物（肉とか）を買い、  
他にも戦闘薬を買った奴らも居た。

そのとき、そういえば村長からアイテムを買ったのを思い出して  
何を貰ったか確認してみた。

『回復薬』だった。

効果は傷を癒すだった。

商店街で俺は、  
自分用に地図を一つと食べ物一つ、スキルカードという物を買った。

スキルカードとはその名のとおり  
自分にそのスキルを追加してくれるカードだ。

俺はレベル1で装備可能な「攻撃付加毒」のカードと「吸収・小」の  
2つのカードを買った。

計3000円としたが、まあ最初はこんな物だろうと思う。

ムラサキはスキルカード  
「吸収・小」「攻撃力上昇」  
を買っていた。

準備も終えたことで人間の村で一番近い村に行くことになった。

1日目始まりの日 俺と魔物ダンジョン・(後書き)

このスライム小説は作者が夢で神様に書けといわれたので書きましたww

感想に面白い名前のチートスキルとか書いてほしいです。  
あまりに面白いとこの小説に出そうと思いますww

二日目だれかの記憶（前書き）

大幅改正しました

前とはかなり違いますOrz



## 二日目だれかの記憶

### 二日目ダンジョンの外

ムラサキさん一行と俺はスライム帝国（明確な名前は存在しない）を出て迷路のようなダンジョンを抜け、外の世界へと出た。

地上へと上る階段を登りダンジョンから出た。

「わああ」

皆声を上げた。

そこは青き空に太陽が輝くまさしく『地上』だった。

この風景は過去何回も見た光景だが久しぶりに見たという感じがした。

迷宮の中は明るく照らされているものの、この空の爽快感は味わえないからだ。

しかし、太陽の日は魔物が苦手なのかスライムが苦手なのか分からないが、とても暑く感じた。

もしかすると、今は夏なのかもしれない。

体感温度28度だ。

「結構あついね」

ムラサキが話しかけてくる。

ムラサキは黒い蝶の飾りで分かりやすい。

ここで俺たちのグループについて、俺たちのグループは5人だ。

<sup>ブラック</sup>俺とムラサキとヤマミズキとハイイロとゴールドだ。

ヤマミズキは青いリボンの初めに会ったスライムで女の子だ。ちなみにムラサキは女だ。

ハイイロは無口の女で飾りに赤い弓が付いている。ゴールドは男で力強さを感じさせられる赤黒い斧の飾りが付いている。

飾りは頭の右端が左端にちょこつと乗っている。性別を付けているのはスライム同士で人間に変化して生殖行為ができるからだ。スライムの状態でもできるが、俺的には美人とかしない主義なのでスライムは論外だ。

今居るところは草原で下を見ると俺たちが登ってきた階段が草原にポツリと存在している。明らかに異質だ。

「ブラック

ここで合ってるよね？」

ヤマミズキが訊ねてきた。

ヤマミズキが訊ねてきた理由は、

ダンジョンに入るための出入り口が地球全体にあり迷路のようにな

っているので  
地図を見なければ移動できないからだ。

「ああ、地図を何度も見てきたんだ。間違いない」

「うん、私も見たもの、間違いないわ。ヤマミズキ  
ムラサキが付け加える。」

「ふっ、俺は早く人間を殺して強くなりたいぜ!」  
ゴールドが自信過剰に言う。

俺はゴールドが死なないか、少し心配になった。

「.....」

ハイイロは喋らない。

歩いて五分ヤクソウ村が見えた。

俺たちは長い草の影で身を潜めている。

門は鉄製の門が2つあり、北門と南門がある。門には門番が3人突  
つ立っている。

門以外の場所には鉄製の柵が設置されている。

鉄製の柵の周りには冒険者たちが徘徊をしている。

鉄製の柵はスライムの体なら何とか通れるだろう。

3人の門番のレベルを【知る権利】のスキルを発動させて見る。  
冒険者たちは全員中年のオッサンで、顔が厳つい。

装備は皮の防具で、不意を撃てば直ぐに殺せそうだ。

【スキル・知る権利が発動されます】

【カラミ・スバルド      LV16】

【ヤミー・デコルト      LV12】

【サナタ・クロスマリネットLV14】

冒険者たちのレベルが表示された。名前まで表示されるとは驚きだ。もし此処に某名前を書いたら死ぬノートがあれば40秒で殺せるだろう。

常時発動の【スキル・プライドなし】で俺はレベル12の敵までなら難なく倒せる。

しかし、門番たちは全員12以上だ、さすがに一人では無理だな．．．

しかし、俺たちは5スライム居るから数の暴力で殺すことが出来る。

「皆、冒険者たちのレベルは右から16、12、14だ。

俺たちのレベルは1。

普通なら勝てる相手ではないが今回は5スライム居る。

皆で力を合わせれば倒せる！」

「そうね、でも念のため作戦を考えましょう」

ムラサキが提案。

俺は元からそのつもりだったので作戦を言う。

「まず俺があの子3人に毒の攻撃をする。

そしてその隙に一番レベルの高い剣士にゴールドとムラサキが攻撃をしてくれ。スキルをガンガン使えば直ぐに倒せるはずだ。

そして、ハイイロとヤマミズキが槍を持った男を攻撃、此方もスキルの吸収や毒を使い倒してくれ。  
そして、俺がレベルの一番低い奴を同じように倒す。」

「ブラックは一人でいいの？」

ヤマミズキが訊ねてくる。

「ああ、俺は攻撃力とかが上昇するスキルを元々持つてるからいいんだ」

勿論【スキル・プライドなし】の事だ。

10分後

俺たちの初戦は無事勝利した。

最初に俺が地面に色を同化させ冒険者三人が喋っている所で、全員  
の首に即効性の毒を付加させた触手攻撃により相手の動きを制限し  
た。

その後ムラサキ、ゴールドがレベルの高い剣士を【スキルカード・  
吸収】や、

ゴールドの【スキルカード・容赦ない一撃】で止めを刺した。

槍を持った剣士はヤマミズキの【スキルカード・連撃】とハイイロ  
の【スキルカード・硫酸】により死んだ。連撃はその名のとおり連  
続で攻撃する技で、硫酸は体の一部を酸化させ相手にやけどを負わ  
せる技だ。

硫酸を顔に受けた剣士はそりゃあもう酷かった。

それとスキルカードはスキルとは違いカードによる効果のものだ。

スキルは自分自身だけの技となる。

俺は余裕でレベル12のヤミー君を毒を食らわせ殺した。  
あの時のヤミー君の苦しみは凄かった。

喉を掻っ切ったので増援もなく無事に終了した。

レベルが上がるの楽しみだ。

ピコピコーン

---

【レベルが6になった】

【能力値が上がった】

【スキル・俺の諜報員 を習得した】

解説

あなたの分身を作ることができます。

あなたは自分の分身を作ることにより更に快適にスライム道歩んでいきます。

「これでキミも立派なスライムだ」

効果

分身はあなたの一部として使うことができ攻撃・観察・諜報  
いろいろなことができます。

分身の能力値は母体の半分の値となります。

MPを1分間に5ポイントずつ使います

魔物カードを確認してみた。

『残金1000円+500円

魔力値25+5〓30

ヨガスライムに進化まで後295必要』

お金が増えた お金が増えた

でも、進化まではまだまだ長いな。

ムラサキたちもレベルがかなり上がったようだ。

ムラサキ LV4

ヤマミズキ LV4

ハイイロ LV4

ゴールド LV5

ゴールドかレベルが一つ高いたぶんゴールドの方が与えたダメージが大きかったから、経験地が多く与えられてんだろう。

村の門で俺は1人の冒険者を殺した。

生きるため、強くなるためには必要なので構わないが、しかし元人間の俺は人間を殺すことに罪悪感を覚える、のは1日前の話です。

はい。

本当に有り難うございました。

神様が俺をスライムにした事で罪悪感を覚えなくなった気がする。前の人生でも楽しむためには他のこと気にしなかったし別に問題なし。

まあ、でも人間を殺して平気なのが元の性格だった場合、

俺の人間性が元々ないという事になるので、きつとスライムになったから性格が変わったんだろう。絶対にそうに決まってる。

スキル【俺の諜報員】が手に入ったのは良かった。このスキルは本当に使える。

「よし、じゃあ人間の死体から剣と防具をアイテムボックスに入れるか」

魔物カードを取り出し、アイテムボックスに収納していく。

物体に魔物カードを近づけると剣が消えてアイテム欄に

『古ロングソード』と表示された。

この作業を繰り返していった。

3人分のアイテムを5人で均等に分けた。

回収作業中にそういえば俺の能力値ってどの位なんだと思ったので、頭の中で念じてステータスを出した。

種族

グリーンスライム      LV6



名前

ブラック

属性

未定

HP 65 / 65

MP 80 / 80

アタック 28

ディフェンス 38

命中率 50%

回避率 20%

一撃必殺率 4%

スキル

【プライドなし】

【王の威圧】 王に進化で解除

【あ、人違いです。スライムです】

【××の記憶】 条件あり

【知る権利】

【俺の諜報員】

備考

スライムに転生した運の悪い高3男子。

このスライムは卑怯なことをするのは当然と常に考えている。美人に優しく。男は死ねが名言のサイテーヤロー。

とある記憶を失っている。

思ったより仲間思い。

.....

備考メチャクチャひでえ!!

何だ俺はそんなにダメな奴なのか!?

しかし、最後の「とある記憶をうしなっている」って

俺はアルツハイマー病にかかっていたのか?

いや、そんな筈はない。

ならどんな記憶を失ったんだ?

もしかしてスキル? 【××の記憶】これのことなのか?

だが条件が分からない。

まあ、いつか分かるだろ。

俺たちはアイテムの回収も終えた事で次どうするかを話し合った。

考えた結果むやみに村に入って捕まったら危険、ということ帰ることにした。

そして、周りを見ると、

冒険者共がいた.....どんなテンプレだよ?

「げっへっへっへっ

何だ!! グリーンスライム5体だけじゃないか」

「ギャハハハハハ

あの中年の冒険者共

最低レベルのグリーンスライムにやられたのかよ、

情けねえエ。

ギャハハツハハハ」

若い冒険者たちが喚く。

ちっ数が無駄に多いな。

全員で6人か。それに全員レベル18代か、不味いな！！

「ムラサキ、ゴールド、ヤマミズキ、ハイイロ、お前らは逃げる。

俺が囿に為る。お前らは生き残れ」

ムラサキたちは怯えていたが、俺が言った事を聞くと目の色が変わった。

「へっお前一人じゃ無理だろ。

俺が居なきゃ足止めにもなんねえよ！」

ゴールドが俺に並ぶ。

「私たちは知り合って間もないけど仲間よ。

それにスライムは人間と違って仲間は見捨てない主義なの」

ムラサキが構える。

「私も怖いけど、此处で逃げたら一生くいが残るから」

ヤマミズキも言った。

「私も囿に為る」

ハイイロも俺たちに続く。

「アア？何だってクソスライムー！！」

とんだ友情だなあ！

まあお前らが何体来ようと関係ないがなあ！！

ギャハハハハハハ

太刀が振り下ろされる。

俺はそれを半身でくらい、

冒険者1人に俺の毒分身をMPを5消費し叩き込んだ。

分身に付加させた毒により1人を毒で殺す。

「なっ！！」

「ジヨニー！貴様ああー！！」

よくもっ！殺してやるっ。

焼き殺せファイアーボール」

燃え盛る炎球が飛んでくる。

スライムのスピードでは避けることができず命中する。

「ぐあああああああああ」

俺の体が吹っ飛んだ。

クソッ

炎球に当たり体の燃えた部分を分裂させ死なずに済んだ。

「クソがああああああああ」

冒険者の1人が叫びながら鉈を振り下ろして背中を切られる。マズ

イツ6人相手じゃ勝てない。

意識が朦朧とし始め体が動かなくなっていく。

俺は仲間のために死ねない。その内にムラサキたちもどんどん重傷を負っていく。

「俺が死んで．．．も．．．お前．．．ら．．．は．．．絶対にコロ．．．ス」

意識が途切れそうになる。分身を作るが狙いが定まらない。

攻撃は出来るが相手を殺せない！

助けないと．．．仲間．．．を

ピコーン

【生命度急低下により自動殲滅プログラムが開始されます】

【オートスキル・××の記憶⇨勇者の記憶が発動されます】

【勇者の記憶からスキル・不屈の英雄が発動されます  
味方の体力が全回復します】

【スキル・勇者の記憶が再度発動されます】

【勇者の記憶からスキル・永久の灯火エターナルファイアが発動されます。  
確認した敵を殲滅します】

【殲滅が完了しました】

【スキル・勇者の記憶から「永久の灯火エターナルファイア」がインストールされます】

自分の体が元通りに戻った。  
仲間の4人の体も全回復している。

冒険者たちは緑色の炎に包まれ跡形もなく消えていった。  
それと同時にだれかの記憶が俺の脳内に流れ込んできた。

「ウワアアアアアアアア」

俺はその場に倒れた．．．．．

金髪の少年は焦ったように叫ぶ。

「アリアは逃げろっ。」

俺が奴等を足止めするー!!」

「そんないけませんわ。」

魔王軍の大部隊相手に一人では到底無理ですわっ!

私も戦います」

聖女という名が相応しそうな緑の髪の女の子「アリア」は金髪の少年を引きとめようとする。

「ちっガルド!

アリアを連れて逃げろ」

「ガルウウ」

銀色の巨大な狼が聖女を銜え走り出した。

俺が死んでも必ず殲滅してみせる。仲間のために。

魔王の軍隊がそこまで近づいてきたのを感じた金髪の少年 . . . . .  
・ 勇者は殲滅スキル『エターナルファイア 永久の灯火』を発動させた。

エターナルファイア 永久の灯火は緑色の聖なる炎により全てを焼き尽くす技で、発動条件は相手を視認することだ。

しかし、魔王の大軍隊はそのスキルがあっても容易に倒せない。

魔物の攻撃が幾度も掠る。攻撃自体は聖なる炎で焼き尽くすことができない。そのため、避けてはいるものの大量の攻撃を何度も避けることはできず致命傷をくらう。

「グッ」

そして魔物たちの攻撃が更に激しくなっていく。勇者におびただしい傷が増えていく、

勇者の目からは血の涙が流れる。圧倒的スキルは代償として血を必要とするのだ。

そのため流れた血は空中で魔力に変換され聖なる炎を生み出してい

く。

激戦から10分魔物たちはまだ3分の1以上残っている。

勇者は後少しと思いつつながら激痛に絶える。勇者の目の前に魔物の攻撃が迫る。

そして記憶は途切れた

【スキル・勇者の記憶から「永久の灯火」<sup>エターナルファイア</sup>の記憶が登録されました】

## 二日目だれかの記憶（後書き）

今回はストーリーを進める回でした。

スライム道はこれから厳しくなっていくですよ！



三日目、依頼されました。(前書き)

今回は少ないです。  
2000字くらい。

時間が足りなかった。

三日目、依頼されました。

三日目、依頼されました。

俺が冒険者たちを焼き尽くし倒れた後のこと、ムラサキたちは俺を背負ってスライム帝国に連れ帰ったそうだ。

そこで、あの炎は何だ？何故私たちが全回復した？

とかいろいろなことを聞かれた。

「俺も知らねえし！あれだろ俺の特殊スキルだろ」といつて置いた。

勇者の記憶、あれは何だったんだ。あの続きを考えると……………  
まずいよな勇者死んでたよなあれ？

うーん、分かん。まあ勇者の記憶は俺の都合のいいスキルだと解釈しておこう。

そんなことより今はステータスの確認をしよう。

種族

グリーンスライム      L V 6 > > 1 6

名前

ブラック

属性

未定

HP 65 / 65 > > 80  
MP 80 / 80 > > 90

アタック 28 > > 35

ディフェンス 38 > > 40

命中率 50% > > 50%

回避率 20% > > 22%

一撃必殺率 4% > > 5%

+ 魔法防御 25

スキル

【プライドなし】

【王の威圧】 王に進化で解除

【あ、人違いです。スライムです】

【勇者の記憶】 未完成

【知る権利】

【俺の諜報員】

+ 【永久の灯火】<sup>エターナルファイア</sup> 超劣化版

『魔物カード』

グリーンスライム LV16

残金 1500 + 3000 = 4500円

今月殺した人間 7体      今月殺した勇者 0体

魔物ランク E 『』

エターナルファイア．．．．だ．．．と！！！！

そんな厨二チートな名前グスツ

うわ〜ん

いやだ〜俺はギャグ路線で絶対死なないと思ってたのに、これじゃあやばいよ。

もうギャグ路線でいられないよ。

シリアス路線に無理やり変えられるんだ。

「1回だけだからさ？ほら1回だけだつて。

騙されたと思ってやってみなよ。」とか言っつて一生シリアスな雰囲気にしていくんだ。

俺は騙されない例えどんなに皆がシリアスだろうと、俺はギャグを選ぶ！

はい、どうも有り難うございました。

冗談はさておき、今俺はスライム病院の一室に居る。

俺が急に倒れたためムラサキたちが運んでくれたのだ。

病室もダンジョン同様レンガ造りだ。レンガの色は白色でベッドに俺は寝ている。ダンジョンのレンガの色は魔王様がダンジョンを改造して何色にでも出来るようにしたのだ。

ベッドの毛布は何かの羽毛だ。フツカフカで気持ちいいぜ。

部屋の外からムラサキたちの声が聞こえる。

ドアがガチャリと鳴って開く。

「あ、おはよう。」

起きたのねブラック」

俺が起きているのに気が付いたムラサキが声をかける。

「ああ、快眠だったぜ」

「おい、ブラックあの「永久の灯火」エターナルファイアってスキルどうやって手に入れたんだよ。」

しかも緑の炎って言えば2代目勇者が使っていた魔物殺しの炎だぜ」

ゴールドが俺に言う。全く俺の心配をしてほしいぜ。

だが、あの記憶の勇者は2代目勇者だったのか。

今度、魔王図書館で調べてみよう。

「まあ何故使えたのかも分からないんだよ。」

だから教えることも出来ねえって何回もいつてるだろ」

「ブラック君はもう大丈夫なの？」

さすがヤマミズキ俺の心配をしっかりしてくれる。

「ああヤマミズスキの薬のおかげで元気になったよ」

俺が笑いながら言うと、ヤマミズキは黄緑の体を赤く染めて

「うん、どういたしまして」と呟いた。

ヤマミズキお前がもし美人な人だったら惚れてたよ。

俺がヤマミズキに癒されていると、

「チツ調子に乗りやがって」

あれ？ムラサキさんですよね？

何か黒いオーラが立ってますよ（ガタガタガタ）  
新手的スキルですか？

「ム、ムラサキ？」

「はい、何ですか？（ニコッ）」

「いや、ナンデモアリマセン

俺は何も見ていません。覚えていません」

やばかった。スキル記憶消去を使わなければ危つく殺される勢いだ  
った。

「……………」

緊急時以外喋らないハイイロはいつも通りか。

病院を出た俺たちは村長の所に呼び出された。

「ハハハハ八そうかそうか。  
もう村を襲ったのか。」

それにしても初戦から君達は1人さえも死ななかったのか。それは素晴らしい事だ。

普通は全滅か、何スライムか死ぬんだがな。

君達は有能なようだね」

今俺たち5スライムは村長に戦闘したときも事を話したところだ。

村長は他のスライムは何体か死んで帰った、と言っていた。

俺たちが死ななかったのはたまたまだ。というより全滅してたんだろうな。

俺たちは、初戦を生き残った事を祝われ1000円プレゼントされた。

これで5500円だ。

それはそうと、その後俺たち個人個人に村長は依頼をした。

「依頼？」

「そうだ、キミたちには依頼を頼もうと思う。

実はこの頃、生活に必要なモノが足りなくなってるね。

それを取ってきて欲しいのだ。

レベルはキミたちが安全に成功するレベルだから大丈夫だよ」

「どこに行けば宜しいんでしょうか？」

「それは、キミたちの魔物カードを確認すれば分かるようになってる」

「分かりました、有り難うございます」

挨拶をした後、ムラサキたちと別れて村長の家を出た。

村長の家から出た後、魔物カードを確認してみた。  
一番下に依頼と書いてあった。

『ランク・F

件名・回復薬を作るための薬草が足りない。

依頼主・回復薬屋のスライム店主

種類・ヤマクサ草、テンプラ草、アオミドリ草、全部×10

場所・ナグラ山

行き方・ダンジョン通りB83を通過して行けるから取ってきてくれ』

薬草を取ってくる依頼か。確かに簡単だな。

俺はスライムだから魔物にはおそわれる可能性もない。

気をつけるとしても冒険者に鉢合わせないしな。でも鉢合  
わせても殺すと思うけどレベルアップのために。  
まあ大丈夫だろう。

今回は個人だから気をつけなといけないな。

ダンジョンを通過していきナグラ山にたどり着いた。



途中でゴボルトやゴブリンにも会った。ちなみにスライム帝国と同じように、ゴボルト帝国、ゴブリン帝国と存在している。

俺はまだ行った事もないが、いつか観光に行ってみたいものだ。そのため、スライム帝国にも何体か下位種の魔物が混じっている。

何故上位種がいないかと言うと図書館で調べたことだが、基本的に魔物の種別で下位種、上位種、と存在しスライム、ゴボルト、ゴブリンは全体で下位種に入る。

上位種にバンパイア、悪精霊、オーガなどが存在している。魔王様と四天王の方々は別物と考える（レベルが違いすぎるため）。

つまり上位種の方たちは俺たち下位種のスライムを見下している。だから、下位種の所に上位種はいないため会う魔物は全て下位種の魔物だと言うことだ。

え、進化した場合？

それはそれで元々スライムなので見下されるのだ。

まあ上位種は俺たちをこき使っていて上で優雅に暮らしていると言っただけだ。

絶対にスライムを上位種にしてやるからな。

上位種になるためには、魔王様に認めてもらうことだ。

強くなって上で下位種を見下して過ごすそれが俺の目標になった図書館での出来事だった。

さあて、ナゲラ山に入るか。

三日目、依頼されました。(後書き)

特に書くことないな。

#### 4日目 レベル上げの日？（前書き）

遅れてスイマセン！

誤字脱字多いかも知れませんが

その奥さん！

## 4日目 レベル上げの日？

ナグラ山に入って10日後、俺は完全にこの森の支配者となった。

（1時間前）

森の中は木々がざわめいていた。  
何だ？この異様な雰囲気は一体どうなってる。  
まあ、これが当たり前なんだろう。

歩いている途中、緑の小4の子供みたいな体に額に小さな角が生えてぼろきれを着ている生物、  
ゴブリンに遭遇した。

俺は同じ魔物なんだから攻撃はされないだろうと近づいてみると、

ブオンツッ！！

木の棍棒を振り回して襲って来た。  
なんだ！？魔物殺しか！！

『解説・魔物殺しとは人間で言う殺人の事だ。』

棍棒をぎりぎりの所で避けて後ろに下がる。  
くそつまさか魔物殺しに遭遇するとは！  
仕方ないそつちがその気なら殺す。  
俺のレベルUPの礎となれ。

「オラアアアアアアアアア」

魔物ランクGのゴブリン如きがこの俺に勝てると思っているのか？  
俺はスライムの遅いフットワークで近づき、実際にはないが目を見  
開く。

カッ

【MPを30消費します】

【ゴブリンに【永久の灯火<sup>エターナルファイア</sup>】を發動します】

ポオオオオオオオオ

俺が目で認識した対象を燃やし尽くす勇者のチートスキル。  
ゴブリンは聖なる炎により一瞬で燃やし尽くされた。

ピコーン

【MPが90/90>>91/91になりました】

全然上がらない。

自分以下のモンスターを倒しても少ししか上がらないと言う事か。

また薬草を探して歩いていると、ゴブリン10匹に会った。

「げへへへへへ。」

お前も参加者か？まあ関係ねえ。

死ねオラァ！！」

ゴブリンが叫んで棍棒を振り回しながら走ってくる。

参加者って何かの大会か？それも殺し合うような。

だが、襲ってくるのなら殺してレベルUPするか！！

俺はゴブリン10匹の集団にMPを30消費し【永久の灯火】を発動させる。

ゴブリンたちは焼け焦げて灰も残らず死んだ。

肉弾戦？怠いのでしません。

それとMPは時間が経つと回復します。

それから頂上に近づくと再びゴブリンが襲ってきた。

全く何の祭りだよ！？

そして、俺は戦っている途中何回か朝日が見えたが、森中で殺しあっている魔物たちを見つけてはMP30を払い勇者の記憶チート【永久の灯火】で殲滅した。

そして、森の中を突っ走ってくるゴブリンたち総勢104体、地中から襲ってくるワーム総勢128体、ゴブリンより体の大きいホブ・ゴブリン145体、合計377体  
全て倒した満月の夜、血の腐臭が全方位からする森の中で俺は歩いていた。

もう俺の体は透明な黄緑ではなく、血の赤色でビッシリだった。  
全身には無数の傷ついた後があり気絶した回数も分からなく成る程戦った。

何百体もの魔物が襲ってきた瞬間には【永久の灯火】エターナルファイアを連発で発動、MPが途中で尽きたので俺は自分の体をMPに変換して死ぬ思いで戦ったときもあった。

いつの間にか索敵スキル【其処にいるのもう分かっている】をゲットしていたのは後から気づいた。

そして一番重要なのは何回ピコーンと鳴った事か分からない中で俺の形態が変化したのだ。

あの時のことは忘れない



~~~~~

「うおおおおお」

雄叫びを上げて俺は何100体目か分からないゴブリン共を殺し終えたのだ。

「はあ、一体この森には何体ゴブリンがいるんだ？」

一休みしていたときそれは起きた。

ピコピコーン

【魔力値が300を超えました。魔物を1000匹以上殺した事により『名誉称号・魔物殺し』が進化に追加されます。】

【殲滅量が一定値を超えたことにより『王の称号・殲滅王』が進化に追加されます。】

【『グリーンスライム』から『ヨガスライム希少種・魔物殺し・殲滅王・色白黒』に進化します。】

【王の称号を手に入れた事により、スキル【王の威圧】が解除されます。】

体の色が白と黒で半分に分かれた色になり体長は2メートルを超えた。

そして白と黒の分かれ目の所に大きな目が出来てその周りを王冠のような模様がついた。

その日から俺はゴブリンたちに「スライムキング」と呼ばれ始めた。  
~~~~~

その後、【王の威圧】の『MP消費0で自分よりランクの下の相手を行動不能にする』という効果で敵の殲滅が楽になった。

【王の威圧】で動きを止めてから敵を触手で殴って殺す事は俺の一般常識になったのは言うまでもない。

そして、能力値とかが比較的上がった。

---

種族

ヨガスライム希少種・色白黒      L V 1 6 > > 4 6

称号

『殲滅王』 『魔物殺し』

名前

ブラック

属性

炎？

HP 80 / 80 > > 1800 / 1800

MP 91 / 91 > > 2000 / 2000

アタック 35 > > 86

ディフェンス 40 > > 70

命中率 50% > > 80%  
回避率 22% > > 30%  
一撃必殺率 5% > > 10%  
魔法防御 25 > > 78  
+ 魔法攻撃力 67

スキル

【プライドなし】

【王の威圧】 + 解除

【あ、人違いです。スライムです】

【勇者の記憶】 未完成

【知る権利】

【俺の諜報員】

【永久の灯火】エターナルファイア 超劣化版

【其処にいるのはもう分かっている】

『魔物カード（魔物は殺してもお金は入りません）

ヨガスライム希少種    LV 46

残金 1500 + 3000 = 4500円

今月殺した人間 7体    今月殺した勇者 0体

魔物ランク B<sup>『</sup>

---

だが安心するんだ諸君、  
私はまだ後2回変身を残している。

で結局この殺し合いは何だったんだ？と思いながら歩いていると山の頂上に着いた。

頂上の真ん中には一つの墓石があった。

何だこれと思いながら触れてみる。

その瞬間光り輝く女神のような精霊が出てきて

『あなたは森の猛者たちを倒してきました。つまり、この森の支配者となる事を誓いますか？』

俺は意味が分からなく説明をしてもらおうと思っていたら、

『はい分かりました。もう決定しました。異議は認めません。では、これから、森の管理とかそこらへんを定期的にしてください。それと、此処の果実とかは好きに食ったりして構いません。では貴方が死ぬまでここは貴方のものとなります。貴方が死なないことを願っています』

といい去って精霊さんはどこかに行ってしまった。

それから、俺はこの森を回って薬草を取って帰ろうとすると、生き残りのゴブリンが俺の前に現れた。

「ボスッ、何か御用はないでしょうか!？」

一番手前のゴブリンが俺に話しかけてくる。  
俺がよく分からない殺し合いを制したせいでこのボスになったという訳か。

「じゃあこの森にある薬草を全部10個ずつ取って来い」  
ゴブリンたちは「命令が来たぞー急いでお届けしろ」と言って走り去っていった。

俺が昼寝して10分間ほど待っていると薬草が大量に届けられた。こうなると予想はしていたので俺はその中から依頼の薬草だけ取ってから「ここを冒険者たちが入れないようにするために開拓して。でも森の木とかはあんまり削るなよ」と言ってスライム帝国に帰った。

ゴブリンたちは目を輝かせ作業に向かった。  
後に此処は難攻不落のスライムキングの城と呼ばれ冒険者たちに騒がれることとなる。

ゴブリンたちに結局あの戦いは何だったのか聞いてみると、この森の支配権争いだったそうだ。  
そして自分たちは精霊の光が見えたので俺の所まで来たのだと言われた。

さいですか。

#### 4日目 レベル上げの日？（後書き）

チートは悪だと作者は思いますが皆さんはどうですか？WWW

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0054x/>

---

魔物ダンジョン～人間との戦争～

2011年9月30日17時52分発行